

## 第73回FIAFロサンゼルス会議報告 A Report on the 73th FIAF Congress in Los Angeles

# ハリウッド、ラテンアメリカへ行く —映画資料保存の先を見すえて 大傍正規

Masaki Daibo

映画誕生から100年の記念すべき年にロサンゼルス(LA)で開催された国際フィルムアーカイブ連盟(FIAF)会議から22年を経て、再び映画の都、ハリウッドで第73回FIAF会議が開催された。今回はハリウッドに拠点を置き、いずれも全米屈指の規模を誇るアカデミー・フィルムアーカイブ(以下AFA)とUCLA映画テレビアーカイブの共催で、4月28日から5月3日までの6日間、前日まで「映画図書館員会議」(14頁参照)が開催されていたアカデミー、ピックフォード研究センターに、69の加盟機関と、32の準加盟機関の代表者らが駆けつけた。「ハリウッド、ラテンアメリカへ行く—ロサンゼルスにおけるスペイン語映画 Hollywood Goes Latin: Spanish-language Cinema in Los Angeles」というシンポジウム・テーマには、やや内向き志向を懸念する声も聞かれたが、いざ蓋を開けてみると、国家的・宗教的・社会的な分断がクローズアップされる昨今の政治的状况の中、20世紀初頭に移民たちが創りあげたハリウッドの原点にいま一度立ち返ることで、多民族国家アメリカに相応しい自らのアイデンティティを再確認するという、アクチュアルな問題意識も垣間見えた。

シンポジウム初日は、スペイン語を母語とする映画研究者やアーキビストら15名が、「スペイン語映画(Cine Hispano)の製作」「ハリウッドにおけるスペイン語圏の映画作家 第一部&第二部」「ハリウッドとその周辺のラテン系俳優」という4つのセッションに分かれ、映画アーカイブが保持しているあらゆる資料を駆使しつつ、ハリウッドにおけるスペイン語映画の隆盛が、その後のラテンアメリカにおける映画産業の誕生と発展に与えた影響、ないしはその

相関関係について、多岐にわたる事例を紹介した。ここでも「映画図書館員会議」から継続参加の発表者为中心的な役割を果たしたことは言うまでもないが—たとえば「ハリウッドにおけるスペイン語映画の起源と発展」について発表したアカデミー・マーガレット・ヘリック図書館(以下AL)のボブ・ディクソン—、やはり今回驚かされたのは、「カリフォルニアでメキシコ映画のパイオニアとなったギレルモ・カレス」や「ハリウッドに招かれたキューバ人監督ラモン・ペオン」等と題し、ラテンアメリカ各国の発表者らが披露した、彼らの映画フィルム・資料コレクションの知られざる充実ぶりであった。1920年代のLAでは、サルスエラ(スペイン語のオペラ)や舞台劇のようなスペイン語圏の娯楽文化が華開き、やがてトーキー映画時代を迎えると、彼らのような舞台人のみならず、世界的に有名なラテン系の俳優たちがハリウッドに招かれた。それが1930年代に入ると、ラテン系の映画監督や技術者の多くが自国に里帰りをして、ラテンアメリカでナショナルシネマが製作される際に、多大な貢献をした事例等が、豊富な資料をもとに明らかにされた。

シンポジウム二日目は、ハリウッドで製作されたスペイン語映画のラテンアメリカやスペインにおける受容の問題にまで射程を広げ、スペイン語映画の国際的な流通が、時にラテンアメリカ各地やスペインの映画産業との軋轢につながった事例等が、テキスト分析を交えて紹介された。

また、「映画図書館員会議—映画を文書化する」との連動が図られたセカンド・センチュリー・フォーラムでは、「映画資料(アーティファクト)の収集・保存・公開 Curating Cinema Artifact」

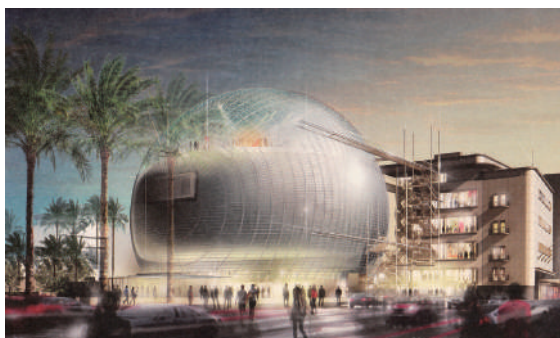
をテーマとして、映画保存とは、いまや映画フィルムのみならず、映画完成時のコンテキストを浮き彫りにする歴史的遺物や紙資料を含めた映画史の総体を保存する取り組みとなったことが強調された。具体的には、3.5日間で1,341枚のキューバ映画のポスターを高速でデジタル化するというUCLA図書館の意欲的な取り組みに始まり、現存

する4本の可燃性ポジフィルムと所蔵資料を駆使しながら、ウィンザー・マッケイによるアニメーション映画『ガーター』の1914年当時のライブ・パフォーマンス興行そのものを完全に再現し、その成果をTVゲームや教育利用、VRの世界にまで拡張して見せたシネマテーク・ケベコワーズの取り組みが注目を集めた。また、ALによる先進的な取り組みを披露した発表「マーガレットに尋ねよ—ALとAFAの連携」では、常日頃より私たちを悩ませている映画完成・上映時の画格から、複数バージョンが作成された際の経緯等々、ALのコレクションに尋ねれば容易に解決できる問題も多いと明言され、見事に細分化された資料群の強みが存分に活かされていた。また、AFAで近年発掘されたアニメーション映画『弱虫珍選組』(市川崑監督、1935年)等を含む日本映画の抜粋集(3,500ft)についても、ALに残された資料から、それらがアカデミー会員向けに「日本映画の進歩を紹介する」宣伝番組のため、JOの大澤善夫が作成・公開した4作品からなる短篇集であったことが、収集の経緯とともに明らかにされた。映画芸術科学アカデミーでは、こうした資料群の更なる活用を目指して、6つのギャラリーと最先端の教育スタジオ、映画館、イベントスペース等が入る「アカデミー映画博物館」の完成も近く控えており、着々と映画保存の未来へと先行投資が行われている。

同日の夜には、LAでも随一の上映環境を誇るサミュエル・ゴールドウィン・シアターにおいて、今年度のFIAF賞を受賞したクリストファー・ノーラン本人が登場し、目下70mmフィルムで現象中の新作『ダンケルク』の予告篇と、『インターステラー』(2014年)の70mm版が上映されると、FIAF関係者とLA市民の興奮は頂点に達した。

最後に総会では、フレデリック・マリー(シネマテーク・スイス)が新たなFIAF会長に選出されるとともに、執行部のメンバーも一新され、次回のFIAF会議は2018年4月22-27日にブラハで、次々回は2019年4月7-13日にローザンヌで開催されることが決定した。

(フィルムセンター主任研究員)



▲「アカデミー映画博物館」の完成予想図(上部1/3を占める回遊スペースからは、ハリウッド・サインも望める)